

# 外語文と日本語

## H 藤 進

バンガローストは「パリ言語学年報」（一九五〇）に「如詞文」(be動詞のよつな繫辞なしの文)にについて書いた論文を発表、その後の文は「一般言語学の諸問題」（一九六六）に収められた。このなかでバンガローストは名詞文と繫辞付きの文との違いを詳細に検討している。

ギリシャ語では繫辞estिのない構文、ベー・クレー・ター・ネーツ（クレータは島である）にたいし、estि付きの構文、ベー・クレー・ター・ネーツ・エスティがある。後者の繫辞付きの文は、時間、空間において限定された個別的事態を強調し、よつとする歴史家とか地理学者、教師などの視点で用いる文体である。実際、*emī*といつ現在形の動詞は特に事態の現状に関わる。過去あることは未来の状況は、知られていないというわけではないが、この「語りの現在」からの視点によって想起せら

れるだけである。他方、名詞文は現時点の状態を伝えるのに適しているわけではなく、時に関係しない事態、たとえば格言とか諺、つまり一般的真理の表現にすぐれる。

古代ギリシャ語以上に、繫辞動詞なしの文を公用したのはサンスクリット語である。aham agnih, tvam varunah 「我是アグニ（神）、汝はヴァルナ（神）」 vanam gatā Damayantī 「ダマヤンティは森へ行った」 (gatā せ「行く」を意味する動詞) の過去分詞、女性单数主格」) とこつた繫辞動詞のない表現がサンスクリット語にせふんだにある。これが例せば、(aham) agnirasmī (我はアグニである) (tvam) varuno'si (汝はヴァルナである) のよつな繫辞動詞付きの文になると、なぜか梵語での役割を離れてこらるい假定的な感じになる。二つの名詞を繫

げるとき、現代印欧語ではほとんどの排他的に *be* 動詞が用いられる。しかしこれは表現の明晰性を増したが、時間にしばらぬことのない真実を表わす力を喪えさせることになった。パンカハニストリモレバ、「助詞表現せられ自体完全なものであつて、その言述は時間あること法による位置付けのやう、語り手の主体性のやうに置かれる」となる」(『諸問題』一卷一六〇頁)。

我々は「ねかぬ」 *IJ* の「如詰文」、この「底」に「て」、日本語では「むかへか」、この「い」とを簡単に検討してみた。

「海は暗ニ」、「クレータ島は大きな島だ」とこへ、現代印欧語の「ぬくべせ」 *be* 動詞にあたる繫辞を必要とする文 (La mer est sombre, La Crète est une grande île) が、現代日本語では上述の「ハ」「ハ」とか「だ」という小辞を用いて表わされる。助詞「ハ」は間投詞的な起源であるとする辞書が多い。「日本語助詞の歴史」(桜風社一九八八) の著者、此島正年によれば、感情的な起源を持つ「ハ」とか「こそ」の類の助詞は間投詞の類に非常に近い性格をもつものである、と述べてこる。個人的には私は、*IJ* の「ハ」は、強調的起源の人称代名詞「わ」、琉球での「ハ(ハ)」に繋がるのではないかと考へてこる。

「だ」は動詞的なものであり、「である」、「です」、「なり」に変えて「よこし」、「だ」を除いて言に切りにしてよい。日本語では、*be* 動詞にあたる繫辞動詞は必ず用いられることが限ら

ないが存在する。*IJ* の「*は*」、日本語「*は*」の種の繫辞を欠く言語とは異なる。

「だ」や「である」や、「にてある」、「んである」、「だ」と縮約した動詞の複合形である、「じゅ」は「じゅ」や「(あり)ます」、「ド」や「ます」、「である」、「だ」、「ある」、「こは」、「にてあります」、「あります」、「でーす」、「です」、「なり」は「(あり)である」、「じゅ」は、主に人に用いられる「居り」、あるこは「*は*」、「き」、「く」、「せ」、「し」、「す」とこつた單音節動詞と同様、最も古く日本語動詞の一つである。「あつ」と後に「居り」となった「居つ」との間の語源的なつながりは明らかではない。「あつ」「をり」の間に母音の交替があったのだとすれば「をつ」はわ行であるか、「おつ」の起源として「ねつ」のやひはものを考えねばならないが、この形は文語以後は存在しない。むつ一つの存在動詞「はぐり」は「過ひ・あり」とこいの動詞からなる合動詞である。

「あつ」と「をつ」が古の動詞であることは、その終止形に、ふつゝ終止形、連体形双方に用いられる動詞語尾「*る*」ではなく、連用語尾「*り*」が用いられていくことからわかる。否定形が「あひや」あるこは「なし、なし」である動詞、「あつ」の語源は定まつてこない。しかし構成要素は「あ」と「つ」の二つである、*IJ* の「*り*」は後にこたるといひで「*る*」となりた古い動詞語尾である。*IJ* の「*は*」の動詞語尾「*つ*」「*る*」を別にす

ると、(じ)での動詞起源の問題は、「ある」(ある)、「れる」(れる)の間にいか関係があるかどうかにこいつもが、(じ)ではこれ以上先に進むことはできない。小学館「古語辞典」(一九六二)の中で著者、中田祝夫は、「あつ」の「あ」は「あらわる」の「あらわす」(あらわす)の「あ」と関係するだらうと述べてゐる。

「島だ!」はしたがつて、フランス語で言え! (Voilà) une île! ところのやうなものである。」の「だ」も必要といつわけではない。「クレータ島は大きな島」、それだけで十分である。」の「は」の場合は二つの名詞、すなわち「クレータ島」と「大きな島」とを並列し結ぶことである。」の「は」は主語「クレータ島」を特立し、非動詞的述語である「島」を提示する。これは二つの名詞から成る完全な断言文である。

「海は暗い」においては、「は」は主語「海」と述語「暗い」を結ぶ。「は」は主語である名詞(句)の要素を他と分離して独立させる役目を果たしている。「海は暗い(しかし空は明るい)」。その結果この繋辞「は」はそれが付着している語(海)のみではなく、言述全体を特立させることがある。

古い日本語では、この助詞「は」は用いられないことが多い。「海は暗い」は「海暗し」であった。この二つの言こととの間に、はわずかの違いがある。「は」を用いない言い方は「海」をことさら特立するわけではないので「海」以外のもの、例えば「は」はどうかということを言外に想起させるわけではない。「海」のある状態そのものを総体として提示しているのである。このでは「海」と「暗し」は対等に並べられていく。「海は暗い」(が空は明るい)といった見えない立体構造を思わせるものではない。二つの語が対等に並べられただけなのだが、一方は主語であり他方は述語であることははつきりしているので解釈が混乱することはない。

「暗い海」である。一方、「は」を用いない「海・暗い」という表現は、「これが「海は暗い」であるのか、「暗い海」であるのか一瞬とまじりうよつた落ち着かない言い方である。

「は」の使用（海は暗い）は、「海」を特立すると同時に、「暗い」とこの語の述語属性を明確にしてくる。フランス語で言えば定冠詞である。

「名詞構文」のなかでパンヴァニーストはフィリピンのタガログ語の例をあげている。この言語では、形容詞の付加（連体）的意味と属詞的意味は、日本語の助詞に似た二つの小辞の使い分けによって表わされる。一つの小辞は冠詞の機能を果たしているが、それが形容詞の前で繰り返されると、その形容詞は付加的意味になるのである。日本語でこの構造を仮に表わすと、（は）子（は）良い＝この良い子、となり、もう一つの小辞の場合、同じ構造で形容詞は属詞的性格が与えられ、（へ）子（へ）良い＝この子、良い子＝この子は良い子だ、となる。

タガログ語では述語（属詞）的表現（この子は良い）はまた、形容詞の前置、主語の後置によっても得ることができる。日本語での助詞の前置はあり得ないが、タガログ語と日本語の間には繫辞動詞の不使用、および小辞の使用の点で構造的共通点がみられる。

助詞の「は」は付着する名詞のみならず、文法的機能だけを

表わす語（助詞、助動詞など）を除き、ほとんどすべての語を特立させることができる。「明るいは空」暗いは海」「走るは彼」といった具合である。

「おかしむかしある男がいた。その男は……」といった昔話の冒頭では、「ある男はいた。その男が……」とこつぶつにはならない。どこの男はこの男を提示せねばならず、いったん男が示されると次にはこの男自身の存在ではなく、属性が問題となるからである。主語を紹介的に特立させるときは「が」、その属性を述べるときは「は」を用いるのが普通である。日本語が重視しているこの強調点の違いは、印欧語の多くでは冠詞、アクセント、抑揚あるいは語順の微妙な塩梅で表わすことだろう。

日本語ではまた、小辞（助詞）抜きの言い方が常に可能であることを付け加えておかねはならない。「私、社長（です）」、「社長（です）」、「私」という言い方の場合、表現性の種類あるいは程度にしたがって、強勢は主語、述語のどの語にも置かれうる。肯定的語尾の「です」に置かれる場合はカマタテ的気取りのよくなものを表わすことになる。

我々は、この二つの小辞「が」と「は」が、古い間投詞、あるいは指示詞（ナ、汝、ワ、吾）に起源をもち、後置されることが除けば、印欧語の冠詞と同じ機能をもつものであると考えている。これ以上の推測はやめるが、少なくともこれらの小辞には動詞的要素が微塵もないと書ひいとはできるだらう。時の

観念(起源的にはアスペクト的なものである)がなく、述語部分の動詞的な言い方に頼らないと否定も作りだせない」ということがその根拠である。こうのは「文法的「時」と「否定」とは、基本的には動詞組織を前提とする統辞法の分野に関係しているからだ。したがつてこうした小辞で結ばれる非動詞文もまた、名詞文であると言ふのである。

さて、名詞文と否定との関係は実際どのようになつてゐるか。無知、反感、不寛容、無意味といった語がもつ否定の概念を意味論的に考へるのではなく、形式的、統辞論的に検討してみよう。

印歐語において「動詞」と呼ばれる品詞は不定形、分詞、あるいは動知詞といったさまざまな形のもつて名詞にもなりうる。英語のstopは「止まる」ことでもあり「止まり」でもある。「往復」aller et retour といった言い方ににおけるallerは名詞である。名詞は主語にも補語にもなりうる語である。「れと回りうな」じせ日本語にも起きている。日本語ではふつうは名詞につく「せ」とか「が」という助詞が、「行くは彼」という言い方では(名詞的に用いられた)動詞に付くことができる。日本語の動詞活用での知詞形は、終止形「行ク」に対してせ「行キ」というように、活用形の多くが母音のイでおわる連用形と呼ばれるものである。この「イの形せ」「行キ・ます」「行ってみる」キ・て・みる」とつて名詞として動詞句を構成する。

昔の日本語の動詞活用には「の」、「イ」、「ウ語尾」の形の他にもう一つの語尾がある。完了を表わす「行ケ・ば(この)バは此島正年によれば、「小辞のハが起源」と、未完了を表わす「行カ」す(に・す、んず、ず)であり、否定には動詞のこの「行カ」という未然形を用いる。エとアとの違いは小さくはない。

要するに、古い日本語動詞の活用には四種の相があり、そのうちの二つの、名詞としても用いられる形のなかの一つが終止形と呼ばれて不定形の役目を果たした。終止形は動詞的述語我行ク)にも、名詞の修飾詞(行ク我)にもなつた。四種の相はすなわち名詞相(行キ)、連用形)、動詞的名詞相(行ケ)、終止・連体形)、完了相(行ケ 已然形)、未完了相(行カ 未然形)である。「」で定説となつてゐる)とがある。まず「ある」に先行して「あり」があつたらしく、一般に動詞では「イ語尾(つまり名詞語尾)」のほうが、ウ語尾よりも古いものだつたらしいこと。それに母音の「」はア・オ、イ(ウ)のあとにできたもの(ひしこ)と、の二つである(松本克己一九九五)。

このことを動詞組織にあてはめてみると、動詞活用は「動名詞・完了」と、「ア(オ)(未完了)」の二つに大別することができる。すなわち「行ク」「来(ク)」について言えば、「行カ」、「行キ」、「行ケ」、「行ケ・来(コ)」、「来(キ)」、「来(ク)」、「来(コ)」それぞれ四つの形は、「行カ」と「行キ」、「来(コ)」と「来(キ)」の二つの形に縮約されうる。「行ク」の活用を構成する二つの柱は「完了」の「行キ」と「未完了」の「行カ」だったのかもしない。動名詞・完了

相（行キ）は已然形（行ケ）の代わりを作りだすことができた。行ケ（行力 + 強意のイ）バ、は名詞、行キを用いた行キ・テ・アレ・バ（行ツタレバ）とこうよひな回つくりに言に方でも表現することができた。日本語では、名詞完了形と未完了形といつ一つの形をもとに動詞組織がつくられたように私には思える。

日本語の否定は、連用形といつ動詞の名詞形ではなく、未完了（未然）形を用いて表わされ、「東京は島な（い）くに・あらず」は「東京は島なり（い・あつ）」の否定である。注意すべきことは、否定をあらわすには常に動詞句を必要とするという（じ）だが、これは現代印欧語でも同じことである。歴史的不定形、あるいは話法の不定形と呼ばれる表現（Et le citadin de dire. 「や）で都會の人人が言つた」というよつた言い方。）れも我々に言わせれば名詞文である）は否定がほとんじ限られないのは、回つくりなく物事をまつすぐに言いたいところの必要と、活用がないことからくる表現の柔軟性の欠如によるものだらう。

これまで述べたことからじんな結論が導き出されるだらうか。時間的な客觀性と物事の因果関係に敏感な印欧語の人々は、細々した言葉の切れ端から知的作業に適した見事な道具を曾々として作り上げてきた。日本語は、名詞文と限らず一般的に、言述を時と空間とに厳密に位置づけることには興味を示さなかつたように見える。指示的起源をもつ小辞、強意の「行キ」と非強勢の「行カ」は見る限り動詞組織の二元性、また、「火

（ヒ）「火（ホ）」、「田（メ）」「田（マ）」に見られる名詞の二元性、といったように、印欧語と極めて似た条件から出発した日本語は、言述の時の周りにただよつている主觀的な関係の均衡をとるまゝに楽しみを見いだしたようである。

日本語は、動詞の繋辞があるつじなからひ、述語が名詞の觀念の主觀的側面を好んで反映する、という意味では、本質的に名詞文的である。日本語で大事なことは、あるものあるいはある事態が言述の時の態勢において、完了しているのかそうではないのか、ということである。未完了形はまだ起きてない事態、つまり仮定的、未来的あるいは命令的な状態（行カ・ム、来カ・ム、古くは、来コ）それに否定を表わすのである。

一方、間投詞、指示詞あるいはふつつの名詞といつたすでにあつた語から作りだされた助詞は古い日本語を構成する本来的な要素ではなく、比較的最近（といつても一千年以上は前のことだらうが）できたものである。しかしいま見たとおり、この小辞のおかげで我々は語り手の注意がヨリヨリ、ヨリのように向けられているかがわかるのである。日本語の名詞文による言述は、バンヴァニストの言ひ、語りの主觀性のそとにあるわけでは決してなかつた。日本語の文法は西歐的な目でみると、客觀的厳密性を欠いていたかも知れない。しかし、これにはある種の主觀性のみがえりがあつたのである。ヨリした助詞を備えた日本語は、これでも「言葉の法」の一つの大きな可能性を示してい

( もひだれ ) いのちせ こむーが 大勢の人々 もの共回

「TOZAI」 様句 の 因卯 に 読 やだ Autour de la Phrase Nominale en

日本語 の 読 こた 文書 の 読 本人 くじ もの 翻語 あれば トロハ

ス人 に わか る もの に 書 こた の で 、 日本語 を 知 る 人 に は 無用 な 読

文 は 無用 、 少 し 異 へ て あ る 。 TOZAI 因卯 は あ も な く い る が 、 そ

な の で 、 トロハ トロハ 読 こた か も 知 れ な い 。 トロハ トロハ

Sur un ancien verbe japonais 「*twu*」 ( 也動詞 「 わ 」 に つ こ と ) に こ

の 読 の 本語 に 読 く 文書 も 載 せ た 。 因卯 に せ ば Sur la déclinaison ver-

bale en japonais 「 日本語 動詞 活用 の 起源 に つ こ と 」 に 読 こた 文

書 かれて こ と あ る 。 い の 「 本語 」 に つ こ と は 也動詞 「 わ 」 に

つ こ と の 読 へ 書 せ 、 日本語 の 動詞 活用 の 起源 を 探 さ ね た め の 事

である。

一一〇〇〇年十四九日